

漱石「方丈記小論」私注(一)

下 西 善 三 郎

明治24年の漱石に、「A Translation of Hojio=ki / with a Short Essay on It」(「英訳方丈記 付、方丈記小論」)がある。

この「a Short Essay on It (Hojio=ki)」という小文が検討にあたいするとしたら、それは、いくつかの主題を並走させるかとおもわせるこの文章が、初期漱石の問題関心に即したものであることに由来しよう。若き漱石が、なにを見、考えようとしたか、初期漱石の関心の一部なりともあきらかにするうえに、この小文がもつ意味は、かならずしもちいさくはない。

本稿では、漱石のこの「A Short Essay on Hojio=ki」について、注解と考説というかたちで、全体的な考察のための基礎稿を提示してみたい。本文の細部にたちどまって簡注をほどこし、しめされた問題についていささかの考説をこころみたいと思う。

使用テキストは、岩波・昭和42年版『漱石全集』第12巻所収本文、344頁～351頁。注解の対象は、僅々、八頁にすぎない。

原文には、表紙に「A Translation of Hojio=ki / with a Short Essay on It / K. Natsume/ 8th December, 1891」とあるほかは、凡例、目次、等、いっさいない。

原文は、十四の形式段落からなる。以下では、この形式段落をいかしつづつ、注解の便宜のために、あらためて十八の段落(【本文】①～【本文】⑱)にくぎりなおす。各段落ごとに、【訳】、【注解】をおき、いくつかの段落のまとまりごとに、【考説】を付す。

誤訳をあやぶみ、失考をおそれる。おおかたのご批正をおねがしたい。

1. 「方丈記小論」関係書誌

注解にさきだって、「方丈記小論」にかかわるいくつかの基本的事項をさらっておきたい。つぎのようなことがらが、問題となる。

- 〈1〉 これまでの言及
- 〈2〉 英訳の依頼
- 〈3〉 依頼と執筆の日時
- 〈4〉 依頼の範囲
- 〈5〉 漱石の使用した『方丈記』テキスト。

〈1〉 これまでの言及

これまで、この文章にあたえられた評言は、初期にあつては「要領を得た解説」というに尽きる。たとえば、

- ① 小宮豊隆「恐らくディクソンから頼まれて『方丈記』を英訳し、その初めに実に要領を得た解説を書いた。」(『夏目漱石・一』岩波書店、昭和13年、p.203)

- ② 吉田六郎「明治24年12月に『方丈記』を英訳し、その初めに要領を得た解説を書いている。」(『作家以前の漱石』弘文堂、昭和17年。引用は勁草書房改版、昭和41年、p.30)。
- ③ 小宮豊隆「恐らく漱石はディクソンから頼まれて、是(=『方丈記』)を翻訳し、是を解説したものに違いない。」(『漱石全集』第12巻解説、昭和42年、p.840)。

しかし、なにについて、どのように要領をえた「解説」であったか。具体的にかたられることはなかった。

この文章を「解説」とよび、そのように見おさめてしまうことは、おいおいあきらかにするように、この小文にふさわしくない。この文章が、「essay(=論説)」として書かれた、ということなをなみするわけにはいかない。「a Short Essay」という名付けは、この小文のスタイルを決定するようにはたらいっているにちがいないのである。このみじかい文章は、英文表題そのままに「A Short Essay on Hojio=ki」=「方丈記小論」とよばれるのがよい。それが、漱石のこころづもりに沿い、また、本文の内意に沿う。

昭和40年代、漱石の「英訳方丈記」に関しての発言をみる。しかし、この「A Short Essay」への言及はない。つぎの二氏である。

- ④ 江藤淳『漱石とその時代・第一部』(新潮社、昭和45年)は、「金之助が特にディクソンと親しかった形跡は皆無であるから、彼が『方丈記』の英訳を依頼されたのは学力が一頭地をぬきんでいたためと考えるのが順当である」(p.209)というのみ。
- ⑤ 荒正人『漱石研究年表』(漱石文学全集・別巻、集英社、昭和49年)も、「ディクソンの依頼で、『方丈記』を英訳する。」(p.80)と言うのみ。

内容にふみこんだ記述がみられるようになるのは、わずかに近年のことである。しかし、それもまた、部分的な言及にすぎない。これまでのところをしめせば、つぎのとおりである。

- ⑥ 藤本徳明「近代文学と鴨長明覚え書」(『説話・物語論集』第九号、昭和56・5)には、わずか数行の紹介的な言及ながら、的確に「(方丈記は)文学的修飾に乏しく、思想性が突出しているうらみはあるが、識者には、その長所の認識は可能だとする。」という簡潔な記述が見られる。
- ⑦ 拙稿「漱石と方丈記」(『日本文学』32巻12号、昭和58・12)は、明治23年8月9日付・子規宛書簡が引用する長明、シェイクスピアに、人生観にかかわっての漱石の「共感」を見出し、「方丈記小論」との少なからぬ関連に一部ふれる。
- ⑧ 重松泰雄「文科大学時代 その希求と煩悶と」(『国文学』平成元年4月)が、漱石の「長明論」(重松には「方丈記小論」は「長明論」と呼ばれている)にふれる。

重松は、「長明論 (=方丈記小論)」から言説の一部を引用しつつこう述べる。

「漱石は、長明ほどの決定的な厭世家が共感の唯一の対象として生命のない自然 (inanimate nature) に心を傾けるのは矛盾だと言い、また長明の自然愛好を捉えて、彼が遁世したのはうつし世のすべてのものが無常で、偶然的なためあこがれる価値がないからだと言うが、ではそれに劣らず移ろうものとしての自然を眺めることに、なぜあれほど彼は感溺したのであろうか。なぜ自然をも捨てなかったのであろうかと問う。ここにも老子の場合同様、「煙霞の癖」を振り捨ててうつし世に生き、新しい生の根柢を切願しつつある人間の不満を透視することができるだろう。」

初期漱石の問題に、「方丈記小論」の文言をすくいって記述された、数すくないためしといえるだろう。

- ⑨ 小泉博一「漱石と熊楠と『方丈記』」(『図書』1993. 12)が、「冒頭にはいわゆる作家論とも言うべき私論を展開し、長明の自然観についてはワーズワースを、長明の人生観についてはシェイクスピアを引き合いに出して論じている」という内容紹介的な発言をおこなう。短文のゆえ考察はないが、このうち、「作家論とも言うべき私論」というとらえかたが、やや限定的な理解であるようにおもわれる。

「A Short Essay」への言及は、管見のかぎりでは以上のとおりである。ただし、〈最初の読者〉は、じつは、明治の外国人教師 J. M. ディクソンであった。

- ⑩ ディクソンの講演記録「A DESCRIPTION OF MY HUT」(“Transactions of the Asiatic Society of Japan” Vol.20, pt. 2, 1893.)のはじめに、とくに「Note」がおかれ、「帝国大学英文科学生、夏目金之助君」の仕事に「多大の恩恵を被った」むね、簡潔に表明されている。

「Note.—For the original draft of this translation, as well as for much valuable assistance in the explanation of details in the translation and in the introduction, I must acknowledge my great indebtedness to Mr. K. Natsume, a student of English Literature in the Imperial University.」

しかし、ディクソンにおいてこの「小論」は、見るように、「the introduction」すなわち「序、緒言」というあつかいしかうけていない。「essay」としてのあつかいをうけていないことが問題である。この点は、〈4〉 依頼の範囲、の項でふれる。

〈2〉 英訳の依頼

『方丈記』の英訳じたいは、漱石にとっていわば「外発的」なものであったらしい。小宮豊隆がつぎのように述べてこのかた、諸家これにならう。

「恐らくディクソンから頼まれて『方丈記』を英訳し、その初めに実に要領を得た解

説を書いた。それにディクソンは、‘excellent performance」といふ讃辞を呈したのみならず、是を基礎として“Chomei and Wordsworth. A Literary Parallel”といふ題で、明治25年(1892)2月10日の『日本亜細亜協会』の例会で講演を試み、この訳文にいくらか手を入れたものを朗読し、後この訳文は“A Description of My Hut”と改題されて、ディクソンの名前で、明治26年(1893)の『日本亜細亜協会』に、講演とともに掲載されたが、その初めにディクソンは、この翻訳の原稿・解説並に翻訳の細部の説明に関しては、文科大学英文科学生夏目金之助君の、価値ある助力に俟つところ甚大であつたと書いてある」(小宮豊隆『夏目漱石・一』岩波書店・昭和13, pp.203~04)。

前記⑩、ディクソンの「Note」に見られるとおり、「価値ある助力 (much valuable assistance)」ということばには、『方丈記』の英訳がディクソン自身の依頼であったことも物語られているのであろう。「英訳」の依頼にかかわる小宮の推定も、ディクソンの「Note」にもとづいているのだとおもわれる。

英訳の依頼は、事実とみてよいだろう。じっさい、漱石の「価値ある助力」は、ディクソンの英訳『方丈記』(A DESCRIPTION OF MY HUT) (“Transactions of the Asiatic Society of Japan” Vol.20, pt.2, 1893.) に、いちじるしい痕跡をこのしている。用語上の類似はもちろん、『方丈記』にとって「本質的ではない (not essential)」という理由で漱石が省略した箇所は、ディクソン訳においてもそのまま省略されている、というような事情がみられるなど、ディクソンにおける漱石訳の摂取のあとは、ほとんど模倣というべきほどである。小宮が、英訳の件を、「おそらくディクソンから頼まれて」というふうに「推測」のかたちで慎重に書くのは、ただの修辞でなければ、どのような事情によるのだろうか。

なお、上掲小宮の、「(漱石の仕事についてディクソンが,) ‘excellent performance」といふ讃辞を呈した」という文言が、なにによって書かれたのかも、今つまびらかにし得ない。小宮豊隆(1884~1966)は、明治25(1892)年当時、8歳。この年の2月10日のディクソンの講演をきいてはいないだろう。発言の根拠は、後年のものであるほかない。が、小宮はその出所をあきらかにしめしているわけではなく、ディクソンの講演記録(「A DESCRIPTION OF MY HUT」および「CHOMEI AND WORDSWORTH: A LITERARY PARALLEL.」<“Transactions of the Asiatic Society of Japan” Vol.20, pt.2, 1893.>)にも、そのような文言は見いだせない。後年、漱石の直談にでもあったのだろうか。

〈3〉 依頼と執筆の日時

J. M.ディクソンからの依頼が、いつであったか、特定しえない。

「金之助が特にディクソンと親しかった形跡は皆無である」(江藤淳、前記④『漱石とその時代 第一部』p.209)という事情からすれば、おそらく、教師とその学生という関係にもとづく依頼は、それほどに時間的余裕をもつものではなかった、とかがえるの

が穏当なところであろう。訳稿が提出されるまでに、あるいはひと月もあつたらうか。

表紙には、「K. Natsume」の署名とともに「8th December, 1891」の日付をみる。この日付（明治24（1891）年12月8日）は、表紙のタイトル（「A translation of Hojio = ki/ with a Short Essay on It」）がしめすとおり、「翻訳」と「小論」のふたつの、〈提出日〉を意味するだろう。

というのも、「A Short Essay」については、べつに、その稿末に、「5th December, 1891」（明治24年12月5日）の日付をもち、これによれば、まず「A Short Essay」が「12月5日」に完成し、その3日後、「英訳方丈記」が完成をみたようにみえるのだが、実際はそうではなく、「A Short Essay」の稿末には、すでに翻訳に際しての苦労がのべられている（「In rendering this little piece into English, I have taken some pains to preserve the Japanese construction as far as possible.」）のであって、これによれば、「12月5日」以前に、すでに英訳は完成していたのである。「5日」までにすべてを完成させ、手もとに3日間とどめたのち、「8日」に提出したとみるのが自然なところであろう。

〈4〉 依頼の範囲

漱石が依頼されたのは、『方丈記』を英訳することのみ、であつたらうか。あるいは附載の当該「A Short Essay」までが、依頼の範囲にあつたのか。前掲〈2〉に引用の小宮の言でも、そのことは明確にしめされていない。

委細は不明といわざるをない。しかし、おそらく、「A Short Essay」は、漱石個人の意志にでるものではあるまいか。

さきにもふれたように、明治26年に発表されたディクソンの「A DESCRIPTION OF MY HUT」（“Transactions of the Asiatic Society of Japan” Vol.20, pt.2, 1893.）のはじめにおかれた「Note」では、この「小論」は、「the introduction」とよばれ、「序、緒言」というあつかいしかうけていない。ディクソンにとって、漱石の提出物（「英訳」と「小論」）は、「英訳」のみがおもんじられた、ということをしめしていよう。じっさい、漱石訳の摂取・模倣によってなつたかとおもわせるディクソン訳という事情に比すれば、「A Short Essay」は、ディクソンの講演内容に影響をおよぼしてはいない、ということも、ディクソンにおける「方丈記小論」の軽視（ないし無視）的態度がみてとれよう。

しかし、漱石の付した「方丈記小論」は、岩波・昭和四二年版『全集』の組版でいえば、八ページ（pp.344～351）におよぶ。英訳本文は十四ページ（pp.353～366）なのだから、これは、量的な面からいっても、「introduction」の範囲をこえるといつてよい。むしろ、この「小論」は「英訳」本文と対等のおもさを主張する文章といつてよいのである。ディクソンが「A Short Essay」をも依頼していたとすれば、内容にかかわつてもうすこし丁寧な言及があつたのではないか。

ディクソンの講演は、“Transactions of the Asiatic Society of Japan”（Vol.20. pt. 2, 1893.）によれば、明治25年2月10日におこなわれている（「read February 10, 1892.」

とある)。漱石の「英訳」および「小論」が提出されて、およそ2カ月。むしろ、ディクソンは独自に講演の準備をすすめていたとみられるから（たとえば、漱石のふれなかつた『長明家集』から、「ほととぎす初音聞きつるなごりにはしばしものこそ言はれざりけれ」の歌に言及する、ワーズワース詩との比較対照に人麻呂の歌を引用する、など）、漱石の仕事などは、もとより参考という程度にすぎなかったかもしれない。しかし、そうであるにせよ、この「小論」がもうすこし丁寧に読まれたならば、すくなくとも「the introduction」という一語でかたづけられることはなかったのではないか。

ひるがえっておもってみれば、漱石の仕事は、ディクソン自身から呈されたという「'excellent performance' という讃辞」（前掲〈2〉・小宮豊隆）に値するものであったのだから、この「A Short Essay」がもつ「introduction」以上の意味は、ディクソンにおいてもじゅうぶん認識されていたのではあるまいか。「小論」には、掬すべき実質的価値が存している。漱石の熱誠が、現在のわれわれにもたしかにつたわる。この仕事が、ディクソンにおいて「introduction」としてしか読まれなかったとはおもえない。「A Short Essay」と名づけられ、そこで論じられたものが、にもかかわらず「introduction」とのみ理解されたのであれば、漱石においても、不本意ではあつたらう。

ディクソンは、「方丈記小論」を正当にあつかおうとしなかったのではないか。

明治19年(1886)東京帝国大学工学部に招聘され、ついで同文学部で、明治25年(1892)まで英語・英文学を講じたディクソンであつたから（新書版『漱石全集』vol. 21, p.300の注解による）、師としてのディクソンは、漱石の学生時代をほぼおおう。

のちの漱石の回顧によれば、学生時代の師ディクソンは、漱石のもともめる方向での師ではなかつたようである。

「其頃は、ヂクソンといふ人が教師でした。私は其先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり、作文を作つて、冠詞が落ちてゐると云つて叱られたり発音が間違つてゐると怒られたりしました。試験には、ウオーヅウオースは何年に生まれて何年に死んだとかシェクスピアのフオリオは幾通りあるかとか、或はスコツトの書いた作物を年代順に並べて見ろとかいふ問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にも略想像が出来るでせう、果してこれが英文学か何うだかといふ事が。」（『私の個人主義』新書版全集、vol. 21, p.137）

後述の【注解】でみることになるが、漱石が、「方丈記小論」を「文学の三類」というところから説きおすことになるのは、文学についての本質的な問いへの志向をかたるものであり、それは、若き漱石の文学にたいする態度のひかえめな表明、あるいは、上記のように回顧されるしかなかつたディクソン教授にたいしてのひそやかな抵抗であつたかもしれない。漱石が英文学科学生として渴望していたものは、「英文学とは、なにか。」、いやもっと、「文学とは、なにか。」という問いについての本質的な回答であつたのだから。

なお、明治24年のこの英訳以前に、漱石には、『方丈記』親炙のあとがある。J. M. デイクソンからのもとめに応ずる漱石には、『方丈記』という文学にたいする内面的理解を再確認しうる好機としてこの仕事があったことを再言しておきたい(この点については、前掲拙稿「漱石と『方丈記』」・『日本文学』第32巻12号を御参照願えれば幸いである)。

〈5〉 「A Short Essay」のために使用した『方丈記』テキスト

漱石が『方丈記』を英訳するにあたってもちいたテキストは、私見によれば、江戸期の注釈書『方丈記流水抄』(享保4・1719) および明治期の『新註方丈記』(明治24年6月18日刊)の二著に限定される(拙稿「夏目金之助の英訳『方丈記』に使用せる本文」・『深井一郎教授退官記念論文集』平成2年3月)。

これら二著の本文の内実が、〈混態本文〉というべきものである点にいささかの注意がはられねばならない。この混態本文は、流布本系統の本文と古本系統の本文が接合されたもの(いずれも『方丈記』の諸本分類におけるいわゆる広本系に属する)であって、こんにち通常に活字化されている『方丈記』(広本系・古本系統の代表本文である大福光寺本が圧倒的である)がもたない表現をふくむ。『方丈記』という作品の基本的なわく組みにおおきな変更はみとめられないものの、思想、表現などについて、微妙な理解のばをもたらず異文が存することになる。漱石の『方丈記』理解にとって、すこしく注意を要する点である。

以下の注解では『方丈記』からの引用は、すべて、武田信賢註『新註方丈記』によることにする。

2. 注解と考説

【本文】①

(P.344, L.1) The literary products of a genius contain everything <* 1 > They are a mirror in which every one finds his image, reflected with startling exactitude; they are a fountain which quenches the thirst of fiery passion, refreshes a dull, dejected spirit, cools the hot care-worn temples and infuses into all a subtle sense of pleasure all but spiritual; an elixir inspiring all, a tonic elevating all minds.

【訳】

天才の文学は、あらゆるものを内包している〈* 1〉。天才の文学は、鏡だ。読者のためもが、おどろくほどに精密にうつしだされた自己のイメージを、そのなかに見いだすのである。天才の文学はまた、泉である。それは、はげしい情熱のかわきをいやし、退屈で落胆した精神に生気をあたえ、はげしい苦悩にとらわれた頭をひやし、ほとんど霊的といってよい精妙な愉悅の感覚を私たちに注入する。つまるところ、天才の文学とは、すべての人々に靈感をあたえる万能薬であり、すべての人々の精神を高揚させる強壮剤なのである。

【注解】

◆〈* 1〉「天才の文学」というとき、漱石においてどのような作家・作品が個別に具体的にイメージされていたか、とまず問う必要はないのであろう。この小文においては、「天才の文学」は、たしかな一つの範疇を構成するものとして提出されており、また一つの価値として述べられている。ただ、ここで見おとしてならないのは、むしろ、「天才の文学」という概念が、個別の観察によって帰納されたものではなく、あらかじめ設定された、ありうるものとしての一つの範疇に帰属するものにたいして名付けられた意味にほかならない、という点であろう。原文を見るとおり、「天才の文学」の属性が抽象的に述べられるほかなく、また、譬喩的に語られるほかないものであったことは、それをよくものがたっているのではあるまいか。

あるいはこういうのがよいかもしれない。次段②に、「能才の文学」ということが述べられる。「天才の文学」が、「能才の文学」と対立関係においてかんがえられていることはあきらかである。それらは、単独に存在するのではなく、差異として存在する。だが、それは、個別の作品の差異ではなく、範疇を区画する概念の関係性の差異として存在する。「天才の文学」／「能才の文学」は、関係性において同時に発生する二つの範疇として考えられているのである。漱石が、「天才の文学」という名付けによって思考の出発をなしたとき、命名は、〈文学〉の範疇を分節しつつ、そのようなものとして〈文学〉の総体をとらえようとするものだったのである。

【本文】②

(P.344, L.4) The works of a talented man, on the other hand, contain nothing < *1 >. There we find fine words, finely linked together and fine sentiments, also finely interposed. But then they are only set up for show. Like a mirage, they strike us for a moment with astonishment, but soon slip out of our mental vision because of their unsubstantiality. We may be amused by them just for an hour or so, then dispense with them forever without incurring any loss to our intellectual storehouse.

【訳】

一方、能才の文学には、なにもものもふくまれていない〈* 1〉。そこにわたしたちが見いだすものは、うつくしく結合された上品ぶった言葉であり、こまかいところまで口出しをするような繊細な情趣である。だが、それらは、ひとに見せるために組み立てられたにすぎないのである。能才の文学は、あたかも蜃気楼のように、しばらくのあいだは、わたしたちにおどろきをあたえる。しかし、すぐわたしたちの精神的視野からすがたをけしてしまう。実体性をともなっていないからだ。能才の文学は、ほんの一時間やそこらはわたしたちをおもしろがらせてくれるかもしれない。しかし、わたしたちは、ちょっとおもしろがったあと、永遠にそれらをすてさっても、わたしたちの知的貯蔵庫にとって、いかなる損失もこうむることはないのである。

【注解】

◆<* 1>「能才」という語は、漱石が『文学論』第五編第一章でもちいる用語による。むろん「才子、才人」の意である。『文学論』には、「能才」を注して「通俗の語を以て此種の人を品すれば才子と云ふが尤も適当なるべし。」(新書版全集 vol.18, p.333) とある。『文学論』との比照に供したいため、ここでは、以下、「能才」の語を使用する。

なお、『虞美人草』(明治40年)に、「然し、自然が結んだものは、いくら能才でも天才でも、どうする訳にも行かない。」(『漱石全集』第3巻、P262) という用例をみる。「天才」「能才」の対的用法は、漱石に一般である。

【本文】③

(P.344, L.10) Again there is a third class of literary production <* 1> which stands half-way between the above two and which will perhaps be most clearly defined by the name 'works of enthusiasm.' Books of this class are not meant for all men in all conditions, as are those of a genius, nor are they written from the egotistic object of being read, nor as a pastime of leisure hours, as those of a talent, but they are the outcome of some strong conviction which satiating the author's mind finds its outlet either in the form of a literary composition or in that of natural eloquence. They are not the result of forced labour or of deliberate artifice, but are feats accomplished, so to speak, spontaneously.

【訳】

さてまた、第三に分類される文学作品 <* 1> がある。それは、うえに述べたふたつの文学の中間に位置し、<熱狂の産物>という名でよべば、たぶんもっともびったりと定義されたことになるだろう。ここに分類される文学は、あらゆる状況下のあらゆる人々むきのものではない点で、天才の文学と異なっている。それはまた、他人に読ませるといふ利己的な目的で書かれたものでもなく、ひまつぶしの娯楽のために書かれたものでもない、という点で、能才の文学とも異なっている。それは、あるつよい信念の成果——著者のこころにみちあふれるあまり、文学的な作品というかたちで、あるいは自然に口をついてでる雄弁というかたちで、そとへの出口を見いだすといったふうなあらわれかたをする、信念の成果——なのである。だからそれは、むりに書かされてきたものでもなく、また、よくかんがえ工夫されたすえにできたものでもない。いわば、自然発生的にうまれでた偉業というべきなのである。

【注解】

◆<* 1> 漱石が、「a third class of literary production (第三の種類文学)」と明確に述べていることに留意しておきたい。もちろん、「天才の文学」「能才の文学」にたいする「第三の種類文学」の意である。しかし、これは、通常の意味で三つに分類す

る場合における「第三」の位置のしめるものではない。名付けにおけるこのレベルの差が、どのようにしてもたらされたものであるか、次段の【注解】〈*1〉でふれる。

【本文】④

(P.345, L.3) At their best where the conviction is so profound as to be raised to the level of truth itself, and the passion attains a white heat, they are in no wise separated from the works of genius <*1>. Even in their worst, they can not fail to attract some readers whose view of life runs in the same groove as the author's, nor can they cease to be a source of pleasure to those whose temperaments happen, in certain points, to sympathize with his <*2>. For whether they be short or long, elaborate or succinct, they are invariably earnest in tone. And earnestness is that quality which carries us along with it, whether we will or not.

【訳】

それらの作品が最高のできばえをしめすとき、つまり、その信念があまりに深遠なため、真実そのものの次元にまでひきあげられていたり、また、情熱が白熱の状態にまで達していたりするような場合、それらの作品は天才の文学となんら区別されるところがない〈*1〉。また、たとい最悪のばあいですらも、著者の人生観と同様のみぞをはしる人生観をかかえもっている読者にとっては、彼の文学は、かならず魅きつけるものをもっているし、また、ある点においてたまたま著者の気質に共感できるものを見いだした読者にとっては、彼の文学は、たのしみの根元でありつづけるのである〈*2〉。というのは、作品が、長かろうが短かかろうが、入念につくられていようが簡潔なものであろうが、かれらの文学は、いつも真剣なトーンをもっているからである。その真剣さこそは、わたしたちがのぞもうとのぞむまいと、わたしたちをひきつけてやまない、かれらの文学の特質なのである。

【注解】

◆ 〈*1〉「第三の種類」の文学の最良のもの」が、「天才の文学」とことなるものではない、とする言葉は、「第三の種類」の文学を、「天才の文学」「能才の文学」と同列・同次元に分類されたものと考え、前段(③)で述べられた言(「ここ(=第三の種類)に分類される文学は、あらゆる状況下のあらゆる人々むきのものではない点で、天才の文学とことなっている。」)に矛盾することになる。だが、これは、矛盾ではない。なぜなら、「〈熱狂の産物〉という名」の「定義」は、「第三の種類」の文学が「定義」されたのではなく、その「特質」が述べられたのだ考えられるからである。「第三の種類」の「特質」として、「つよい信念の成果」「自然発生的な偉業」(③段)という性格、「真剣なトーン」(④段)という文体上の特徴、を漱石が指摘している点を確認しておきたい。すると、「第三の種類」については、その内実が説明されたのであるから、その点から、「第三の種類」の文学が「天才の文学」のもちうる内実と区別されないできばえを

しめす場合がありうることとなろう。もっとも、それは、「すべての人々」にとって、という条件がのぞかれた場合において、ということになるだろうが。

かくて、前段をあわせていえば、「天才の文学」「能才の文学」「第三の種類の文学」という名付けは、前二者が関係的な命名であるに対し、「第三の種類の文学」は実体的な命名となっている、という特徴をもっていることが知られよう。

◆〈* 2〉「著者の人生観と同様のみぞを走る人生観をかかえもっている読者」「著者の気質に共感できるものをみいだす読者」についての言及は、のちの【本文】⑥に述べられることになる「選り抜きの少数読者」についての伏線となっている。

なお、『吾輩は猫である』（明治38～39年）に、「芸術が繁盛するのは、芸術家と享受者の間に個性の一致があるからだろう。」とある。

類似の発言を芥川龍之介にみる。「〈選ばれたる少数〉とは、必ずしも最高の美を見ることのできる少数かどうかは疑わしい。むしろ、ある作品に現れたある作者の心もちに触れることのできる少数であろう。」（『文芸的な、余りに文芸的な』「三八 古典」）

【考説、I】

以上に検討した部分からだけでも、この「方丈記小論」が、たんに『方丈記』の「解説」ではないことはあきらかであろう。「essay」として出発しているというそのすがたは、冒頭からすでに明白なのである。

紙幅の都合上、かんたんに述べるしかないが、〈文学〉の〈分類〉を問題にするところからの出発は、漱石の文学的態度の表明となるものであろう。それはまた、おそらく〈文学における価値〉論をも含意していたのだとみることができるし、〈文学と読者〉という問題への接続も、そこからの必然であったとおもわれる。この思考のありかたは、のち、明治40年に刊行されることになる『文学論』の一部をさきどりするものと考えられるのだが、詳細は別稿を期したい。

（上越教育大学言語系助教授）